

資源管理・海洋環境シリーズ

操業日誌からみたオホーツク海のケガニ漁業の特徴と近年の資源状況

キーワード：漁業データ、ケガニ、オホーツク海、操業日誌、長期データ

はじめに

ケガニは北海道を代表する味覚の一つであり、道民のみならず本道に観光にやってくる方々にとっても魅力ある食材です。1996年以降のケガニの漁獲量は全道で1,000～3,000トンで推移しており、そのうちオホーツク海（宗谷・オホーツク総合振興局内）は半分程度の漁獲割合を占め、重要な生産地となっています（図1）。

北海道においてケガニはほとんどがけがにかごを用いた漁業で漁獲されており、けがにかご漁業者の自主的管理のもと、毎年「許容漁獲量」という漁獲量上限を設定し、その許容漁獲量を超えないように漁獲を行っています。また、甲長8cm以上の雄のみ漁獲しています。

オホーツク海のケガニ漁獲量は2010年台頃までは概ね1,000トン以上で安定していましたが、近年、2016以降では500～1,100トンの間で減少→増

加→減少と増減しています（図1）。このように、2016年頃から漁獲量の増減が著しくなると同時に、地域間の資源分布の偏りも大きくなり、地先ごとに資源状態や漁獲状況のより詳細な説明等が重要となっています。そこで今回は、操業状況を記録する操業日誌調査の結果をとりまとめ、資源状態の指標である資源密度調査結果と合わせて海域ごとの状況を整理しました。

資源密度調査から見た地域ごとの資源状態

資源密度調査は、年1回、資源状況を把握し、翌年の許容漁獲量を算定するための基礎となる分布調査で、基本的には漁業終了後の4～6月に行われます。海域別（図2）にみた資源量指数を図3に示しました。ここで資源量指数は甲長

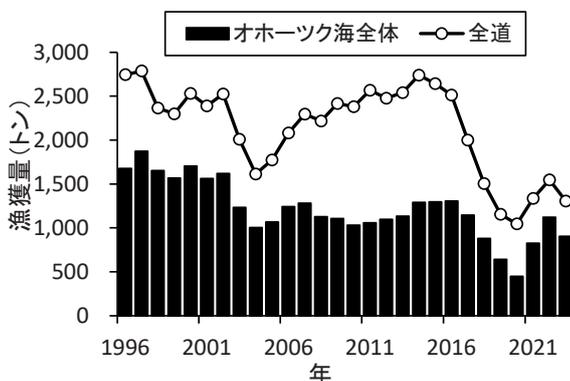


図1 ケガニ漁獲量の推移

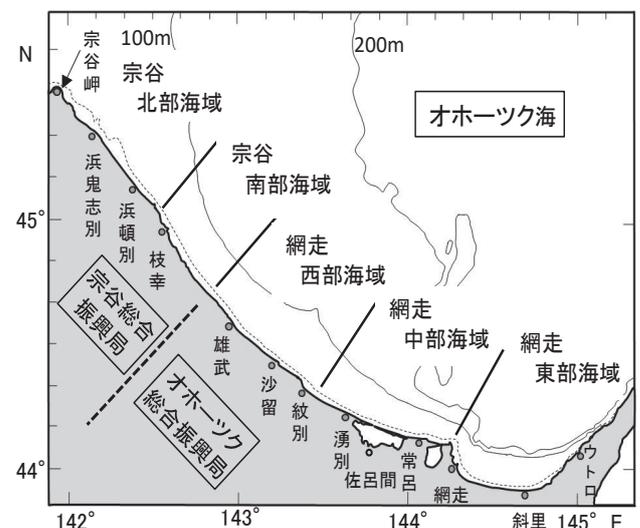


図2 海域区分について

7 cm以上の雄（翌年の漁獲対象資源）の資源状態を表す数値であり、数値が大きいほどケガニが多く分布していると考えてください。

資源量指数は1999、2006、2013年頃にどの海域もピークがみられ、周期的に変化しています（図3）。しかし、近年では漁獲量が下がり始めた2016年以降2019年にかけて、宗谷北部海域と網走東部海域を除いて残りの3海域の資源状態は軒並み低い状態で推移しています。その後、網走東部海域は概ね横ばい状態、宗谷北部海域は2020～2022年に非常に高く、2023、2024年は2020～2022年の半分程度になりましたが、他の海域よりは高い状態でした。このように近年はこの宗谷北部海域の資源が全体の資源を左右している状態です。

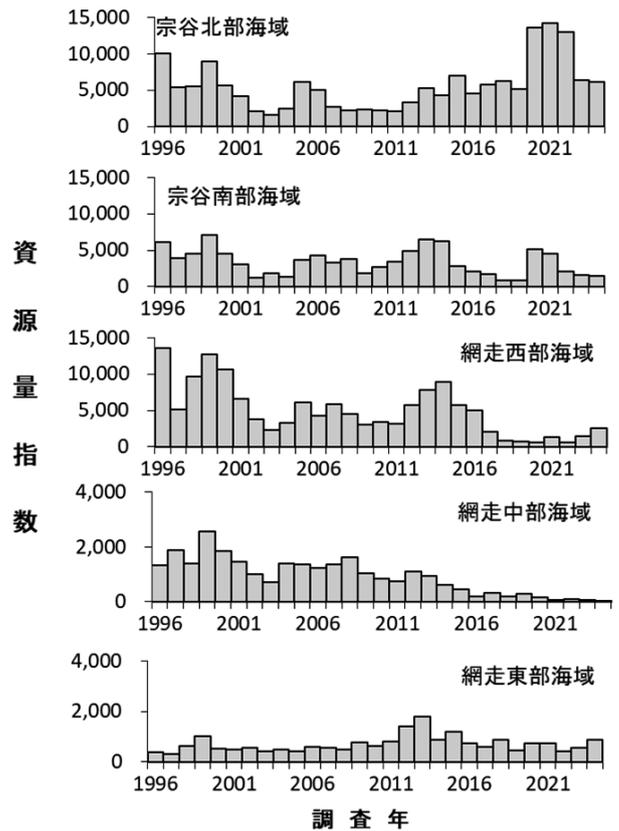


図3 海域別にみた資源密度調査結果の資源量指数の経年変化

操業日誌調査から見た漁獲状況

では、漁業の実感はどうでしょうか？そこで、

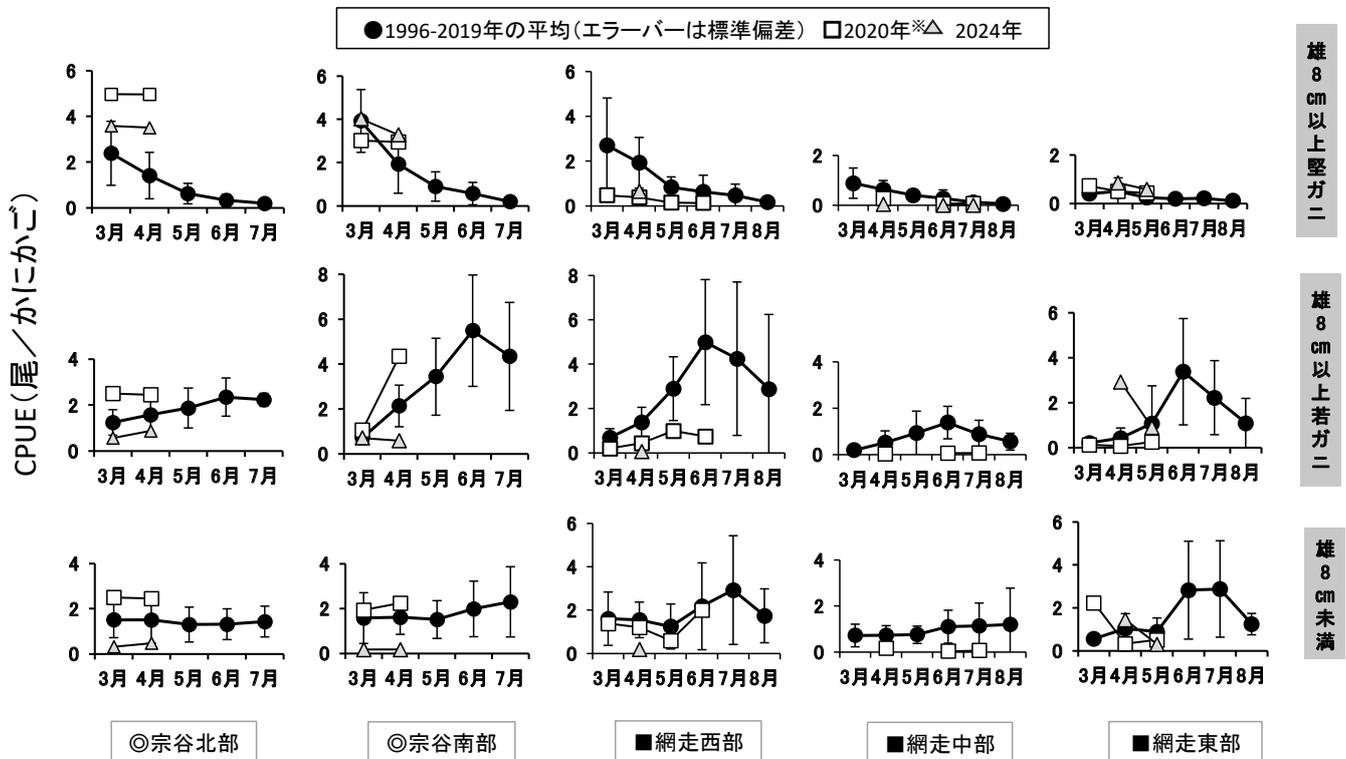


図4 操業日誌調査で得られた月別海域別CPUE（1かご当たり漁獲尾数：尾／かにかご）の月別変化
当海域の漁期は3～8月までだが、近年はほぼ5月末までに操業を終える事が多い。
※網走東部のみ2021年

操業日誌調査の結果について整理しました。調査はまかご一杯調査とも呼ばれ、全船の漁業者が月2回ほど操業状況を日誌として記録する調査で、1996年から実施されている貴重な調査です。具体的には、漁獲されたケガニを保管するかご（通常“まかご”と呼ばれる）が満杯となるまでに要した揚げかにかご数とケガニの銘柄別の尾数を記録してもらいます。ここから、CPUE(尾／かにかご)を計算しました(図4)。この数値で漁業での“獲れ具合”の感覚を数値で表しました。

① 雄甲長8cm以上堅ガニ

漁獲対象となるケガニです。1996～2019年の平均値(●)をみると、CPUEは各海域で漁期始めに高く、時期が進むにつれ下がります。これは漁期が進むにつれてケガニが漁獲されて減るためと、春先に堅ガニが脱皮し減り若ガニとなるためと考えられます。

近年資源状態が最も良い宗谷北部海域では資源が急増した2020年のCPUE(□)は平均値の2倍以上となっており、資源が減少した2024年(△)においても2020年より減ったものの、平均値よりはまだ高い状態でした。宗谷南部海域と網走東部海域では平均値並み、網走西部・中部海域は2020年のCPUEは平均値よりかなり低くなっています。

② 雄甲長8cm以上若ガニ

若ガニは、脱皮後の甲殻が堅ガニほど固くなる前の状態のケガニで、過去には漁獲対象でしたが、近年は漁獲していません。各海域ともCPUEは漁期始めには低く、6月頃に最も高くなり、その後また下がる傾向があります。これは、春先脱皮したケガニが徐々に固くなり、餌を探してかごに入りやすくなるためと考えられています。過去のCPUEの平均値は7月以降に下がりますが、この時期から若ガニを漁獲していたためと思われます。近年は漁獲していませんので、次年度以降に漁獲

対象となります。

2020年のCPUEは宗谷北部・南部海域で平均値より高かったものの、他の海域は平均値より低くなっていました。2024年は網走東部海域を除いてCPUEは平均値より低く、後続資源の減少が伺えました。

③ 雄甲長8cm未満

次年度もしくは2年後以降に漁獲対象となる資源です。②と同じような傾向が各海域ともみられ、やはり2024年では平均値より低い海域がほとんどで、こちらの結果からも後続資源の減少が懸念されました。

以上のように、操業日誌調査から漁獲対象資源の月変化や近年の資源分布の偏りや地先ごとの獲れ具合といった漁獲状況の特徴がわかりました。また、直近2024年は操業日誌からも資源は少ない状況が伺え、今後漁獲加入する後続資源も少ないといった情報が読み取れることがわかりました。

おわりに

まかご一杯調査による操業日誌調査(図4)は資源密度調査(図3)とよく対応していました。今後はこういった操業情報も活用して漁業者への説明会等で現場へ情報提供をしていきたいと思えます。

以上、今回の報告では、現場で漁労作業中に記載していただいた貴重な操業日誌のデータを取りまとめました。これまで長年調査にお付き合い頂いた漁業者ならびに漁協職員の方々に改めてお礼申し上げるとともに、今後ともケガニの資源評価、資源管理の推進にご協力よろしく願いいたします。

(田中伸幸 網走水試調査研究部
報文番号B2498)